

『みんなの笑顔のために』

前期後半がスタートします！

夏休み前集会で、「いただきます」と「ご馳走様」の言葉の意味を説明し「食べ物を大切にすることは、命を大切にすること」というお話をしました。前期後半も、「命を大事に、人を大事に、心を大事に、物を大事にできる笑顔輝く菊水小のこどもたち」を育成するために教育活動に取り組んでまいります。

夏休み中、様々な場面で子どもたちの活躍を見ることができました。なごみ川沿郵便局落成式での船山太鼓、また和水川舟ペーロン大会や古墳祭に参加してくれた子どもたちがいました。夏休み明けも、様々な場面で活躍してくれることを願っています。

また、8月20日（日）に実施しましたPTA 美化作業にご協力いただきました保護者の皆様、大変お世話になりました。おかげさまできれいな環境で前期後半を気持ちよくスタートすることができました。今後も、本校教育活動へのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

「てまえどり」

最近、コンビニ等で見かける「てまえどり」の表示。

農林水産省は、食品ロス削減に向け、一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会、消費者庁、環境省と連携して、小売店舗が消費者に対して、商品棚の手前にある商品を選ぶ「てまえどり」を呼びかける取組を行っているのです。

次は、以前読んでいたある会報に載っていた文章です。



スーパーに賞味期限が五日後の牛乳と六日後の牛乳が並んでいると、日本では殆どの方が賞味期限の長いほうを買って行く。より新鮮であり、保存も長く持つからである。しかし、アフリカの小さな村では、村人たちは賞味期限の切れそうなものから買って行くのだという。貴重な食べ物を捨ててはいけない。だから賞味期限の迫ったものを自分が買って、より新しい食べ物は仲間たちに残すのだ。仲間への思いやりのある消費、そして食べ物の総量が乏しいことを知っている消費。日本の私たちの消費に他者はいない。仲間はいない。まして、残された賞味期限の短い牛乳の行方を案じたり、考えたりする人はいない。物のあふれる日本では、仲間の顔の見えない寂しさが人々を益々孤独な消費に走らせている。本当に豊かな社会とは、どちらの国のことだろうか。

食べられるのに捨てられてしまう食品を「食品ロス」といいます。日本の食品ロスは年間約523万トン（令和3年度）になり、世界の飢餓に苦しむ人々に向けた食料援助量（約420万トン）を上回ります。現在、地球上には約80億もの人々が生活していますが、途上国を中心に8億人以上が十分な量の食べ物を口にできず、栄養不足で苦しんでいます。

その一方で、先進国では余った食料がまだ食べられるのに捨てられているのが現状です。

日本の食料自給率は先進国の中でも低く（カロリーベースで約38%）、多くの食べ物を海外からの輸入に頼っています。しかしながら、多くの食品ロスを生み出しているという状況は、社会全体で解決していかななくてはならない課題の一つです。その解決策のひとつが「てまえどり」なのです。

